わがまち紹介

北海道南西沖地震災害より30年　奥尻島の新たな挑戦
奥尻町

奥尻町基礎データ

総人口	2,386人 （R４．７末現在）	漁獲高	313百万円 （R２北海道水産現勢）
老齢人口（高齢化率）	991人　41.53% （R４．７末現在）	製造品出荷額	24百万円 （R２工業統計表）
世帯数	1,501世帯 （R４．７末現在）	卸・小売年間販売額	2,561百万円 （H28経済センサス）
人口密度	16.7人／㎢	一般会計規模	4,887百万円 （R４当初予算）
面積	142.99㎢		
農業産出額	160百万円 （R２市町村別農業産出額）	町の花	ハマナス
		町の木	イチイ

奥尻島の紹介

奥尻町は北海道本土南西部の日本海に浮かぶ外海孤島で、面積142.99㎢、人口約2,400人の１町から成る離島で、島の周囲は実に84㎞にも及び、複雑な海岸線は海の幸の宝庫となっています。

町名の「奥尻」は、アイヌ語の「向こうの島」を意味する「イクシュン・シリ」に由来し、その後「イク・シリ」と訛ったもので、歴史は古く、約８千年前の縄文時代早期に人が移り住み、多くの貴重な遺跡や遺物が出土しています。

明和４年（1767年）に田口九兵衛が漁業を営むために移住して以来、永住する人が増えたといわれ、明治２年（1869年）に奥尻島全体が「奥尻郡」となり、明治12年（1879年）に戸長役場が置かれ、明治39年（1906年）に「奥尻村」、昭和41年（1966年）に現在の「奥尻町」となりました。

島の基幹産業は、古くから水産業が盛んで「夢の島」「宝の島」と呼ばれ、明治末期まではニシン漁が主体でしたが、近年はイカやホッケの近海漁業や、ウニ、アワビを中心とした磯根漁業が主であり、その豊富な海の幸を求める観光客が多く、水産業と観光業に力が注がれています。

奥尻島特産の海産物

また、気候は、北海道南西部に位置していることと対馬暖流の影響もあって、年間平均気温10度前後と北海道の中でも比較的温暖な

気候に恵まれ、降水量1,000㎜前後の年間降水量は島の面積の８割を占める森林で特に多くあるブナの木々とそれに由来する優れた保水力によって離島でありながらも水資源が豊富であり、水田での稲作も行われています。

奥尻島の特徴であるブナ林に触れ合える
「奥尻21世紀復興の森」

奥尻島は東西11km、南北27kmの南北に長い台形状の形をしており、島の全域が花崗岩の海成段丘で形成され、その段丘を横切って河川が流れるため滝が多い地形となっています。また、かつて硫黄が採鉱されていたこともあり温泉資源にも恵まれています。

壊滅的な被害を受けた災害

平成５年（1993年）７月12日午後10時17分、突然奥尻島を襲った大きな揺れと数分後に大きな津波をもたらした「北海道南西沖地震」によって壊滅的ともいえる甚大な被害を受けました。

この地震では、地震の規模を示す大きさとしてマグニチュード7.8が記録され、揺れの大きさは震度６の烈震と推定（当時は島内に地震計が設置されていなかった）されました。地殻変動による地割れや陥没、建物の倒壊、液状化現象、崖地の崩壊など島内の各地区で大きな物的被害をもたらすとともに、地震発生から２～３分後には津波の第一波が来襲し、その後数波の大津波によって、特に震源域に近い島北端部のほか、南端部や西海岸の集落が壊滅的状態となり、人的被害だけで死者172名、行方不明者26名、被害総額約664億円にも達する大惨事となりました。

地震後に発生した火災により
焦土と化した青苗地区

復興からのまちづくり

震災以降、奥尻町の人口は著しく減少し、景気不況が続きました。

漁港での避難先と整備された人工地盤「望海橋」

この状況を打開すべく新たな産業おこしとして、島の基幹産業である漁業や農業における既存の取り組みに付加価値を付するため、イワガキ養殖やブドウの作付け、酒造用米などの希少で新たな食材開発（新規作物）を奨励し、後継者や新規就業者が取り組める環境づくりを進めました。

奥尻産ブランドイワガキ「奥伎（おうぎ）」

また、地域間での相乗効果を求めるため、沖縄県伊平屋島との連携による「おもてなし」を取り入れたスポーツ観光としてのムーンライトマラソンを開催するなど交流人口の拡大を図りました。

震災15周年には、島をゆっくり歩いて「島時間」を味わっていただき、島の自然、暮らしに触れてもらおうという「奥尻島フットパス」をスタートしました。景色を楽しみながら、また、島の人に話しかけてみることで、新たな魅力が生まれるかもしれません。

「奥尻フットパス」

四半世紀を超えての新たな挑戦

奥尻町は北海道南西沖地震による未曾有の災害から来年で30年を迎えます。

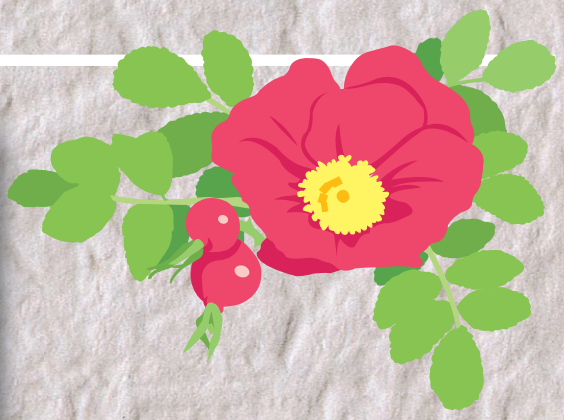
復興からのまちづくり以後の取り組みでは、漁閑散期のトラウトサーモン海中養殖や道立高校を町立へ移管しての「まなびじま奥尻プロジェクト」展開の一環として、全国から生徒を募集する「島留学」などの新たな島おこしを進めています。

また、奥尻町は離島であるが故に海上輸送等で島外からの物資に頼らなければならない環境下にあり、その一つとして石油製品のエネルギーがあります。発電所用や各家庭の暖房用として、その多くの石油製品は輸送コストや貯蔵コストが嵩むことや荒天時の枯渇リスクがあることから、地域内で産むことができる再生可能エネルギーの活用が求められており、離島では全国２例目となる地熱発電による電力供給や豊富な森林資源を活用した木質バイオマス燃料の供給が行われています。

離島では珍しい地熱発電

奥尻町では再生可能エネルギーの一層の活用と地球温暖化対策などへ対応するため、地域脱炭素化への取り組みを進めようと、風況が有望とされる奥尻島沖合での浮体式洋上風力発電の可能性を検証するため、環境省とともに調査を進めています。持続可能なまちづくりを目指すため「サスティナブル・アイランド奥尻」と称し、地域脱炭素社会の実現に向けて、関係者と連携・協働しながら脱炭素によるまちづくり・しまづくりに取り組んでいます。地熱・水力・太陽光・風力・木質バイオマスの再エネフルメニューで「ヒト・モノ・カネが有機的に循環するリズムを生み出し、人の絆と営みを育むことができるまちづくり」を実現するため、持続可能な離島・奥尻島の挑戦が始まりました。

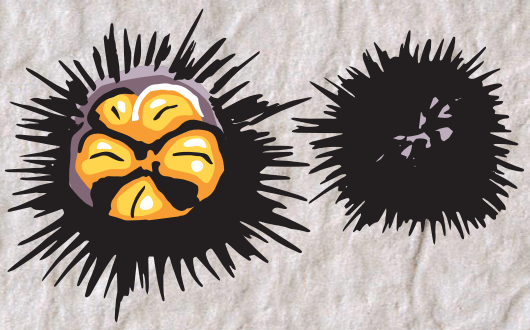
奥尻町の四季



【春】離島北限の田植え

【夏】東風泊海岸での海水浴

【秋】ブナ林の黄葉



【冬】冬の西海岸